

## 「人類史」総合研究体制の構築

### ① ビジョンの概要

「全人類が共有する歴史」という性格を持ち、「人の身体・文化・社会が多様化した経緯」を解明するなど、人間理解への大きな潜在力を有する人類史について、文理共同の組織的研究を推進する体制構築を目指す。

### ② ビジョンの内容

近年、ホモ・サピエンスの起源についての解明が進んできたことを受け(図1)、これを軸にした「人類史」と呼ばれる新たな歴史記述が試みられるようになってきた。このアプローチは、異なる立場にいる全人類の歴史を俯瞰的に描こうとすること、万年スケールあるいはそれ以上の長期的視点で「全ての成り立ち」を解明しようとする、歴史に文化や社会のみならず生物学・自然科学的視点を加味した総合的人間観を供することなどの諸特徴を

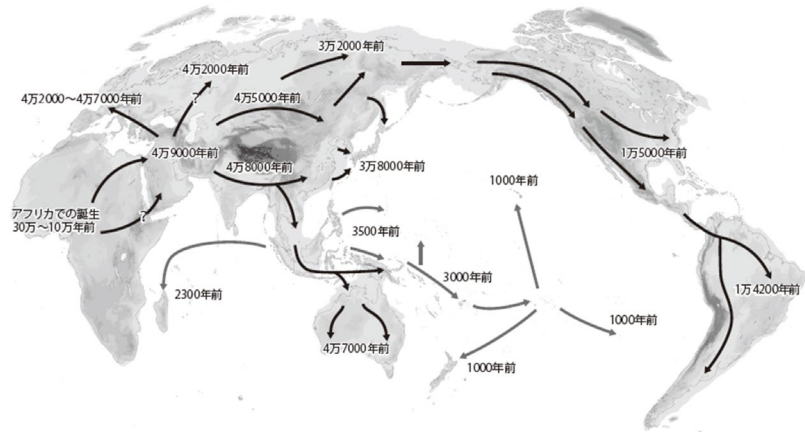


図1 ホモ・サピエンスの起源と拡散。30万～10万年前頃のアフリカに起源し5万年前以降に全世界へ広がった。

有する。これは究極的に「人類多様性の意味」を理解し、人々の相互理解を深め、他集団への誤解や偏見を軽減し、“あるべき人間観”へと我々を導く効力を持ち得る。

このような人類史研究を学術コミュニティが組織的に推進し、その知識を広めていくことは、平和で健全な社会実現へ向けて極めて有益であるにちがいない。そこで関連諸分野(霊長類学、生物人類学、考古学、歴史学、文化人類学、民俗学、地域研究、生態学、環境学など)において100年前後におよぶグローバルな研究蓄積をもつ我が国の強みを活かしながら、これらを融合させて人類史研究を活性化する基盤を構築する。具体的には、分野横断型の大規模研究を実施しつつ、各分野が定期的に相互学術交流する場として、数十の既存学会が協調する「人類史学会連合」(仮称)を創設し、研究の活性化とともに、そのような総合的素養を持つ次世代研究者の育成を目指す。

### ③ 学術研究構想の名称

「アジア人類史」の総合的研究

### ④ 学術研究構想の概要

ビジョンで示したモデル研究の1つとして、アジアにフォーカスし、当地域において人・文化・社会が現代のように多様化した経緯をさぐる総合的研究を実施する。さらに「人類史学会連合」(仮称)の創設に向け、関連学協会の連合体の最適な運営母体を探り構築する。

### ⑤ 学術的な意義

【背景と重要性】アジアの人・文化・社会が多様であることは広く認識されているが、その本質(実態や成因)については学術的に不明な点が多いばかりでなく、一般社会での誤解も蔓延している。そもそも「アジア」は欧州の東方世界を指す語として欧州でつくられた語であり、アジアの住人に「アジア人」としての一体感や共通の歴史認識というものは、事実上存在してこなかった。しかしグローバル化の中で域内の経済・文化的つながりが深まる一方、安全保障環境も激変するなど、現在のアジアには希望と不安定さが入り乱れている。このような中、アジア諸地域の人々が知られざる互いのつながりを理解し、相手に対する敬意を持って共存の道を探ることの必要性は、かつてないほど増しているといえる。つまり「アジア」の住人が自身の地域とその歴史を理解し、「アジア人」とは何か、その中での自分たちは誰なのかを考えるべき時がきている。これまでの研究から、アジア人の集団間の多様性のルーツは意外に浅く、基本的には5万年程度の歴史しか持たないことがわかっている。また近年のゲノム人類学の成果は、人種や民族とよばれる集団単位がかつて考えられていたほどの実態を持たず、“歴史的虚構”の側面を持つという歴史学・文化人類学からの指

摘を立証しつつある。ただしこうした研究は、技術開発で先行し活発な学際交流の伝統がある欧州主導で進んでいる現状を否めない。日本の諸学問分野はこれまでそれぞれにアジア研究をリードしてきており、このテーマに多大な貢献を果たす蓄積と潜在力を持ちつつも、専門分化の進行と文理に隔てられている教育体系の弊害などのため、構造的に協調の機会が乏しく、巨視的視点からの研究実践がうまく機能してこなかった。

【期待される成果と効果】本計画で、共通祖先集団から現代に至る多様化の歴史を追うことにより、身体形質変異を生じる遺伝的基盤、身体特徴と生理機能の関係、文化の多様化が生じる要因などについて数々のブレークスルーを期待できる。このような「アジア人の本質」に関わる基礎的知見は、地域の医療や健康管理、人間工学や居住環境デザインなどの暮らしの改善計画立案に活かすことができるもので、人類学以外の他分野への波及効果も大きい。さらに、伝統的な国別の歴史研究はナショナリズムと結びついたり政治利用されたりする危険性を孕むが、アジア人類史という観点はそれを乗り越えるものである。この取り組みにより、アジア地域の共通性と多様性の理解を各段に高めると期待され、それは人々の相互理解を促進し、地域の安定的発展に貢献するものとなる。これら一連の研究と同時進行で、「人類史学会連合」（仮称）の創設を目指すことも本計画の要である。連合体構想は、個々の研究者が異分野の最先端動向あるいは一般社会のニーズを容易に把握できる環境を整えるもので、異分野協創によるブレークスルーが生まれ、広い視野を持つ次世代研究者が育つ場となることを目指す。さらに、不確かなニュースが溢れAIが台頭する現実世界で適切な情報発信を継続することは学術コミュニティの使命であるが、とりわけ人類学関連のそれは、人間の尊厳を守ることにつながる重要使命である。多くの専門家が多彩な分野の最先端知識を共有する場を設けることは、適格な情報の発信源を増やすことに直結し、大きな効果をのぞめる。

## ⑥ 国内外の研究動向と当該構想の位置付け

アジア人類史への関心は国際的に高まっており、欧州や豪州を中心にアジア人の大規模ゲノム解析や遺跡調査が活発に行われている。本計画はアジア域内外の諸外国との協調を重視しながら、日本がこれまで蓄積してきた関連諸分野の知見を共有・統合し、国内研究体制のベースアップをはかるものである。

## ⑦ 社会的価値

人の多様性の意味と共通性への理解が深化することは、医療・人間工学・環境デザインなどに貢献するだけでなく、社会における適切な人間観の醸成に寄与し、SDGsが掲げる不平等解消・公正・平和への基礎を与える。歴史上、数多の思想家や哲学者らがそれぞれの人間論を提唱してきたが、本計画は、時代に左右される個人的見解ではなく、人類史という切り口から、エビデンスに基づいて、学術コミュニティとして隙のない人間理解を目指すものである。とりわけ近年のアジアでは、各国がそれぞれに経済成長や発展を遂げる中で、対立やきしみも多く生まれている。特に国別に編纂される歴史には、不一致や齟齬を免れない側面があり、社会の不安定化要因の1つとなっている。そのような現代であるからこそ、国家単位の歴史記述を越え、広く深い視点から人間全体の歴史を問い、そこからみえてくる多様性の意味と人としての共通性に目を向けることが重要であろう。そうした人間観の共有は、究極的に地域内での相互理解を促進し、平和と安定に資するはずである。

## ⑧ 実施計画等について

### 【実施計画】

R6：個別研究開始、学協会ネットワーク整備

R7-R14：個別研究と連合体構想の推進

R15：人類史学会連合（仮称）発足

### 【所要経費】

総額 20 億円（設備備品・消耗品費：5.5 億円、研究・招聘旅費：2.5 億円、事務局運営費：1 億円、若手研究員雇用費：10 億円、その他：1 億円）

### 【実施機関と実施体制】

総括事務局を東京大学総合研究博物館に置き、個別研究プロジェクトはテーマごとにリーダーあるいは実施機関を定める。連合体構想については、関連学協会の代表に運営委員会に参加してもらう。

## ⑨ 連絡先

海部 陽介（東京大学総合研究博物館）